

暗唱のすすめ

〈古文編④〉

枕草子

清少納言



まくらのそうし
はる

春はあけぼの。

ヨウヨウしろ

やま わ すこ あ

やうやう白くなりゆく山ぎは、少し明かりて、
むらさき くも ほそ

紫 だちたる雲の細くたなびきたる。

なつ よる

夏は夜。

つき

オ ほたる おお と イ

月のころはさらなり。やみもなほ、螢の多く飛びちがひたる。

ひと ふた

ひか ユ オ

また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。

あめ ふ オ

雨など降るもをかし。

あき ゆうぐ

秋は夕暮れ。

ゆうひ

やま は チコウ

からす ねどころ

み よ

夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の、寢所へ行くとして、三つ四

ふた み と いそ エ ワ

つ、二つ三つなど飛び急ぐさへあはれなり。

かり つら

ちい み

ヲ ひい は

まいて、雁などの連ねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。日入り果

かぜ おと むし ね ユフ

てて、風の音、虫の音など、はた言ふべきにあらず。

ふゆ

冬はつとめて。

ゆき ふ

ウ

しも しろ

雪の降りたるは言ふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと

さむ

ひ いそ

すみも わた

ひる

寒きに、火など急ぎおこして、炭持て渡るも、いとつきづきし。昼になりて、

ひおけ ひ しろ はい

ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。